

日本18世紀学会第27回全国大会
プログラム
報告要項

2005年6月11日(土)、12日(日)

日本大学文理学部

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40

第27回大会プログラム

第1日 6月11日(土)

9:30 受け付け開始

会場 日本大学文理学部百周年記念館・国際会議場

10:00-10:05 開会挨拶

10:05-10:55 自由論題報告(1)

会場 百周年記念館・国際会議場

「18世紀の舞踏資料が語る、宮廷舞踏会の反絶対主義的様態」
赤塚 健太郎(成城大学)
司会: 磯山 雅(国立音楽大学)

10:55-11:45 自由論題報告(2)

会場 百周年記念館・国際会議場

「思考において他者の立場をとる ――名誉欲をめぐる初期カント美学の分析―」
木村 覚(国土舘大学)
司会: 福田 喜一郎(鎌倉女子大学)

11:50-12:45 お昼休み*

12:45-13:45 総会

会場 百周年記念館・国際会議場

13:50-14:40 自由論題報告(3)

会場 百周年記念館・国際会議場

「筑前唐泊孫太郎ボルネオ漂流記」
岩尾 龍太郎(西南学院大学)
司会: 青木 孝夫(広島大学)

14:40-15:30 自由論題報告 (4)

会場 百周年記念館・国際会議場

「マブリの初期政治思想におけるノミナリズムとレアリズムの相剋」

菅原 多喜夫

司会：逸見 龍生（新潟大学）

15:30-15:50 コーヒー・ブレイク

15:50-16:40 自由論題報告 (5)

会場 百周年記念館・国際会議場

「デュ・シャトレ夫人と『プリンキピア』をめぐる謎：ジェンダーはいかにして
テキスト解釈に忍び込むのか」

川島 慶子（名古屋工業大学）

司会：田邊 玲子（京都大学）

16:50-17:50 コンサート

会場 新図書館3階「オーバルホール」

演奏：佐藤亜紀子（リュート）

曲目：L. ヴァイス「リュート組曲 ト長調」（抜粋）

J. S. バッハ「リュート組曲ト短調」

18:00-20:00 懇親会

会場 カフェテリア「チェリー」

会費 4000円

* 11日（土）、12日（日）のお弁当をご希望の方はお申し込みください。なお、土曜日は学食が開いていますが、日曜日は開いておりません。下高井戸駅近辺（徒歩10分ほど）には多数レストランがありますので、お弁当を希望されない方は各自でお取りください。

お弁当代：1000円

第2日 6月12日（日）

9:30 受け付け開始

会場 日本大学文理学部百周年記念館・国際会議場

10:00-10:50 自由論題報告（6）

会場 百周年記念館・国際会議場

「ベルナルド・ベロットの景観画再考—一点景人物の問題を中心に—」

金沢 文緒（東京大学）

司会：大野 芳材（青山学院女子短期大学）

共通論題 「近代都市の胎動」

会場 百周年記念館・国際会議場

10:55-11:15 序論

コーディネーターおよび総合司会

佐々木 健一（日本大学）

11:15-12:00 第1報告

「マンチェスタ：近世から近代へ」

近藤 和彦（東京大学）

12:00-13:00 お昼休み*

13:00-13:45 第2報告

「ルーマニアの古都スチャーヴァ」(仮題)

三宅 理一（慶應義塾大学）

13:45-14:30 第3報告

「殖民都市バタフィアの盛衰」

野村 亨（慶應義塾大学）

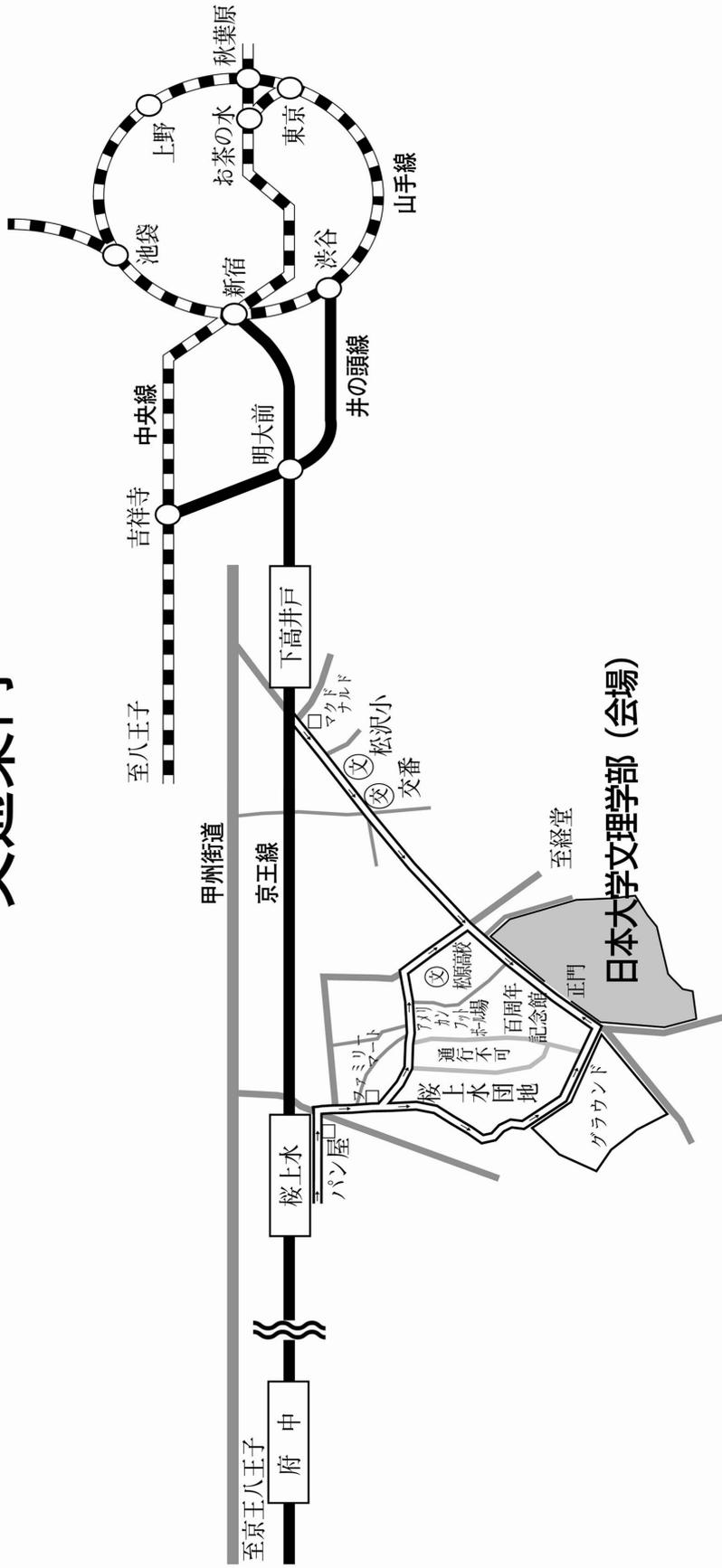
14:30-15:15 第4報告
「ヴェルサイユ・北京・江戸」
渡辺 浩（東京大学）

15:15-15:30 コーヒー・ブレイク（質問書回収）

15:30-16:30 討論

16:30 閉会挨拶

交通案内



- ・京王線「下高井戸」下車徒歩8分
- ・京王線「桜上水」下車徒歩5分
- (道順は「下高井戸」下車の方が分かりやすいです)

自由論題報告

会場 日本大学文理学部百周年記念館・国際会議場

1 8 世紀の舞踏資料が語る、宮廷舞踏会の反絶対主義的様態

赤塚 健太郎
(成城大学)

絶対主義国家という巨大なシステムを現出せしめる上で、王や廷臣の体が重要な役割を果たしてきたことは従来指摘される通りであり、多様な国家儀礼や宮廷スペクタクル等において宮廷人の体は様々な形で王権の絶対性を喧伝する記号として機能した。殊にフランスのルイ14世は、王自らが優れた舞踏家として数々の舞台に立ち、「太陽」に代表されるような様々な役柄を踊り演じたことで広く知られており、当時の舞踏と王権との関係については様々な学問領域で研究がなされている。しかしそれらの研究の多くは、劇場舞踏のみを対象としてとりあげており、舞踏会舞踏について言及されることは少ない。

確かに舞踏会舞踏は劇場舞踏と異なり、文字によって記される筋書きをそもそも伴わないため、舞踏にこめられた政治的な意義について直接論じることが困難である。しかし、舞踏家フィエが1700年に舞踏記譜法を公にしたことを受けて、18世紀前半には多数の舞踏会用振付が出版されており、また同時期には幾人かの舞踏教師が舞踏会の模様を詳細に記述しているため、我々は当時の舞踏会という宮廷行事及びそこで踊られた舞踏について、その実践内容を詳しく知ることができる。従って、舞踏会の式次第やそこで踊られた舞踏の詳細、あるいは会場に布置された観衆としての宮廷人達の模様を観察することで、舞踏会が当時の王政の中でいかなる機能を果たしていたかを論じることが可能である。

こうした議論は、舞踏会舞踏がむしろ王権の絶対化に抵抗しようとする傾向を持っていたことを明らかとする。例えば舞踏会の催主は王に限定されるものではなく、また踊られる舞踏は宮廷の成員に対して広く開かれているため、誰もが舞踏会の主となりえた。また、舞踏を通じて絶えず顕示されるのは貴種性の高低に基づく旧来の身分秩序であって、王ですらその秩序に組み込まれることとなる。一方で具体的な舞踏のステップに目を向けると、当時隆盛を誇ったクーラント及びメヌエットはいずれも宮廷人の日常的挙措と接続しており職業舞踏家的な肉体改造を要するものではないため、王権が踊り手を独占することもできなかった。

劇場舞踏が既存の身分体系を超越するような王権の絶対性を鼓吹したのに対し、舞踏会舞踏は旧来の身分秩序を保全しつつ王権を相対化していたのであって、当時の舞踏を絶対王政の支配装置としてのみ理解する視点は修正されねばならないだろう。

思考において他者の立場をとる
——名誉欲をめぐる初期カント美学の分析——

木村 覚
(国士舘大学非常勤講師)

I・カント（一七二四—一八〇四年）が『判断力批判』（一七九〇年）においてはじめて展開した「判断力の超越論的美学」は、美しいものや崇高なものを判断という場に限定して論じ、またその判断が他者を顧慮する反省の論理に基づくことを明らかにした点に、その特徴の一端をみとめうるものである。そこでは他者の顧慮は、あくまでも「他のあらゆるひとの表象の仕方」を思考の内ではア・プリオリに顧慮すること、自分の判断を「総体的な人間理性」に照らし合わせてみることであった。ところで、このような批判期の哲学に適った決着に至る以前にもカントは、それこそが美学の中心テーマであるというかのように、他者の内なる形成の問題を問うていた。その最初期における興味深い考察の足跡を、しばしば連関が指摘される六四年の二論文『美と崇高の感情に関する観察』『脳病試論』を通して辿ることが、本発表の課題である。その際中心に据えるべきは、名誉欲をめぐる議論である。

判断に限らず広く社交の場面を論じる『美と崇高』で、カントは名誉欲を「徳の虚飾」とする一方「非常に有益」ともみなす。真の徳と繋がる諸原則に従う者こそ、「美と崇高の感情」をもつ人間であるとしても、彼らは極めて少数だとも考える当時のカントにとって、その他多くの人間を「公益的な行為」に駆り立てる手だては名誉欲だからである。利己心を抑制する名誉欲は、「彼の振る舞いがとる外見を判定するために、思考において自分自身から出てある一つの立場をとる」よう促し、他者に映る自分を善くしようと務めさせる、その点で優れている。しかもそこにカントは、大きな多様性を反省するとともにその内に統一をみる可能性を考えてもいる。とはいえ、この他者の内なる形成は「愚かな」とも形容される「妄想」に基づく事実から免れることはない。『脳病試論』は、尊敬を得たいとの衝動が、「破滅に引き込むような要素」でもあることを明らかにする。名誉欲によって自己の内に他者を置き、自分を他者の立場から反省することは、過剰に自分に引きつけて他者を考える場合にひとを狂気に陥らせる可能性を生みもする。この両面性・不安定性こそ、観察者カントが都市という舞台のうえで社交する人々に見出したものである。本発表が明示しようとするのは、『判断力批判』での決着のなかでは注目され難い近代的人間の実像を浮き彫りにした、こうした当時の彼の着眼点である。

筑前唐泊孫太郎ボルネオ漂流記

岩尾 龍太郎
(西南学院大学)

18世紀末、博多のロビンソンというべき漂流者がいた。筑前唐泊浦の水主孫太郎（帰国後孫七を名乗る）である。物語の成立基盤には筑前五ヶ浦廻船という日本有数の船団の活躍があった。その一隻、当時最大級1600石の伊勢丸は、津軽の材木を搬送中、陸常境沖で冬の北西風に遭難、20人の水主たちは三ヶ月を超える過酷な太平洋漂流を生き抜いた後、何地とも知れぬ浜に漂着するが、彼等はやがて原住民に捕獲され、ミンダナオ、ズールー、ボルネオを奴隷として転売された。「売り首」という奇怪な習俗の犠牲になる可能性すらあった。孫太郎は仲間と死に別れ生き別れ、バンジャルマシンで彼を買った華僑の「孝」観念を巧みに利用して脱出し、明和8（1771）年にオランダ船で長崎へ送還され、一人9年ぶりに故郷に帰った。彼には1807年（梶原後書）に没するまで36年の余生があったが、海禁政策のもと船乗稼業を禁ぜられ、「寡孤貧困にして、傭賃して活を取」（亀井南冥）状態を伝えられるほか何も分っていない。元来孫太郎については、南冥の高弟にして福岡藩最初の洋学者青木定遠の『南海紀聞』に拠ることが多かったが、これはかなり後の聞書き（1820木版の秘密出版）である。これに対して、帰国直後から群出した『漂流天竺物語』『華夷九年録』系の物語がある。定遠のように「雑書」「杜撰甚多」「皆虚妄」として退けることができるか、検討を要する。種々写本の存在から推察して浮かび上がってくるのは、初めは禁じられていた異国の体験談に脚色を重ねて喋っていた元漂流民の姿である。また写本のつねとして、物語は写されるたびに変化を施された。

それほどに強烈な体験であり物語であった。現在はほとんど忘れ去られているが、石井研堂は「古来の漂流記録中、文学的価値あるものを挙ぐる時は、『孫七天竺物語』と『督乗丸船長日記』を双璧とすべく、或ひは土州長平の『漂流日記』を加へて三部とすべきか」と評価する。本発表の目的はこの博多のロビンソンを忘却の淵から掬い出すこと、そのための史料調査の道筋、長崎奉行所調書（『通航一覽』270）、未発見の福岡藩浦奉行調書系物語、地元筑前版と全国版『漂流天竺物語』系写本の関係等を紹介することである。

マブリの初期政治思想におけるノミナリズムとレアリズムの相剋

菅原 多喜夫

マブリの最初の政治的著作に『市民の権利・義務について』がある。この著作は、それまで歴史およびヨーロッパ公法について研究し執筆してきたマブりが、これらの研究によってえた知見を政治学の分野にはじめて応用したもので、1758年秋から60年にかけて執筆されたものと推定されている（刊行はマブリ没後の1789年）。私は、この著作のなかに、功利主義に傾いたノミナリズム的な認識論をレアリズム的な方向に乗り越えたうえで、その成果を法律学に適用しようとするマブリの試行錯誤がみられるのではないかと考えており、この点をめぐって小考してみたい。

『市民の権利・義務について』は、「私」とスタノップ卿というイギリスからの客人がパリ郊外のマルリで行った対談を、「私」がパリ在住の知人に8通の手紙で報告するという形式をもった著作であり、手紙の日付は1758年8月である。また対談そのものも、この手紙とほぼ同時に行われたという設定になっている。ここで注目すべきなのは、1758年8月という日付のもつ意味であるが、前月に有名なエルヴェシウス『精神論』発禁事件が起こっており、『市民の権利・義務について』も、この事件となんらかのかかわりを有する著作ではないかと推測されるのである。

『市民の権利・義務について』の冒頭、マブりは、イギリス的な政治論を仮託したスタノップ卿に、「善悪の観念は社会の創設に先行した」と完全な自然状態からの無制限で自由な社会創設を否定し、自然状態においても原初的制限が存在するという、実弟コンディヤックの感覚論的な立場を採り入れた独自の社会起源論を語らせている。

またその先の議論で、法の根拠をつきつめていくと prescription（規定／時効）でしかないとする「私」に対し、スタノップ卿は沈黙で応えるが、この沈黙のなかに、哲学的なノミナリズムとレアリズムの論争を法律学に適応したうえで、ノミナリズム的な法概念とは異なる法概念を模索するマブリの試行錯誤的な態度が伺える。

『市民の権利・義務について』は、一般的に分類すれば自然法的な考え方の枠のなかに位置づけられる著作であるが、そうした発想が生じてきた出発点に功利主義的な思想との対決があったことは、自然法思想のとらえ方にとっても示唆的ではないだろうか。

「デュ・シャトレ夫人と『プリンキピア』をめぐる謎：ジェンダーはいかにしてテキスト解釈に忍び込むのか」

川島 慶子
(名古屋工業大学)

デュ・シャトレ夫人 (1706–1749) は、文学史上ではヴォルテールの恋人として知られている18世紀の才女だが、科学史においてはニュートンの『プリンキピア』仏訳・注釈者としての側面がつとに有名である。この本は現在のフランスにおいても、信頼できる唯一の『プリンキピア』全訳であり、その注釈部分はニュートンの説が18世紀において代数的にはいかに解釈されていたかを教えてくれる貴重な史料でもある。

ところが夫人の死後十年たって出版されたこの本の成立過程をめぐっては、現在に至るまで延々と続く誤解が存在する。本論はこの誤解がどこから生まれ、なぜそれが継続しえたのかをジェンダーの視点から解説するものである。ここでは下の二つの説をとりあげる。

1) デュ・シャトレ夫人はヴォルテールやモーペルテュイに影響されてニュートン主義者となっていたが、ケーニッヒに影響されてライプニッツ主義者となり『物理学教程』(1740)を執筆した。しかし再びニュートン主義者に戻って『プリンキピア』を翻訳・注釈した。

2) デュ・シャトレ夫人は『プリンキピア』の翻訳作業中に詩人のサン・ランベールと恋愛して妊娠したのだが、この子供を嫡出子とするためにヴォルテールと組んで夫のデュ・シャトレ氏をだまし、夫の子供だと思わせるのに成功した。

1の説の出所はヴォルテールがあちこちに書き残した文章に由来する。特に『プリンキピア』仏訳につけられた彼の序文はこの説を強化し、近年には専門家の間では否定されたもの、一般にはいまだ根強い説となっている。しかしこの説が事実と反するならば、なぜヴォルテールはそのような「嘘」をつき続けたのか。また人々はなぜそれを信じてしまうのか。

2の説の出所はヴォルテールの秘書ロンシャンの回想録に由来し、いまだに専門家の間でも支持されることがある説である。しかしデュ・シャトレ夫人自身あるいはヴォルテールの手紙や当時の医学理論などを考慮すると、とてもうのみにはできない。なぜロンシャンの回想録は当事者たちの証言よりも尊重されるのか。

かつて民衆の間で首飾り事件の真犯人がマリー・アントワネットだと信じられたように、人々は面白おかしい説に飛びつきたがる。だが無秩序にはな

い. そこにはその説が生き残る「必然」の土壌が存在するのだ. そしてその「必然」を強化するひとつの要素としてのジェンダーバイアスはいまだ健在なのである.

ベルナルド・ベロットの景観画再考—点景人物の問題を中心に—

金沢 文緒
(東京大学)

ベルナルド・ベロット (1722-1780) は、18 世紀ヴェネツィア景観画の巨匠アントニオ・カナル(通称カナレット)の甥としてヴェネツィアに誕生した。伯父の工房に入り、早くから景観画家としてヴェネツィアで活動したが、1747年にイタリアを離れ、ドレスデン、ウィーン、ミュンヘン、ワルシャワ等の北方都市にその拠点を移す。彼がそれらの地で制作した景観画は、第2次世界大戦後の諸都市の復興に大きな貢献を果たしており、都市の視覚的資料として今なお高い評価を得ている。

しかしこの評価は、同時にベロットの芸術的特質を写実性に固定することにもなった。ベロットの景観画に関する先行研究も、この側面から展開されてきたと言える。本発表は、これを受けて、従来の研究では看過されることの多かった点景人物に注目し、彼の景観画に新たな光を当てるものである。

ベロットは、イタリア時代に、風景画家フランチェスコ・ズッカレッリとローマの建築物をモチーフにした4点のカプリッチョ作品の共同制作を行った。彼は、ズッカレッリとの共同作業を通して、牧歌性への理解と、牧歌的雰囲気を出せる有効な手段としての牧歌的人物像への認識を深めた可能性が高いと思われる。

続くドレスデン時代には、ベロットの牧歌性への傾倒は、写実性を要求された景観画に少なからぬ影響を及ぼすことになった。ドレスデン近郊の田園都市であり、ザクセンの軍事的要地であったクーニツヒシュタインを主題とした5点の景観画連作は、この問題についての有効な手がかりを与えてくれる。

その後ベロットはワルシャワの地に移住し晩年を過ごした。ワルシャワ景観画群では、既に彼の中に萌芽的に存在した芸術的特質が、新たな展開をもって結実している。

本発表では、ベロットの絵画における牧歌的人物の分析を通して、「現実」と「想像」という対立概念の視覚化という、画家の生涯の芸術的課題の存在を新たに指摘すると共に、この視点から彼の芸術的変遷を概観する予定である。

共通論題報告 「近代都市の胎動」

会場 日本大学文理学部百周年記念館・国際会議場

マンチェスタ：近世から近代へ

近藤 和彦
(東京大学)

教科書的「常識」としてはマンチェスタは産業革命の中心、1700年ころには人口約9千、1801年センサスでは約9万に成長した「雨後の筍」であり、19世紀には cottonopolis ともよばれた世界資本主義の中核であった。進歩と自由の拠点ともされる。

このマンチェスタは、18世紀初めにデフォーが「イングランドにおける最大の村落の一つ」と形容したとおり、市壁はなく、制度的に市参事会もなく、荘園領主の法廷や、国教会の教区会 (vestry)、州の治安判事などの権限が並存複合していた。とはいえ、この地はペナイン山地に発する3つの川が合流する可航上限であったので、ローマ時代の要塞もあり、中世には牧畜と繊維業の集散地、そして陸路と水路の交わる要衝であった。古い目抜通のうち Deansgate はデーン人 (ヴィキング) の痕跡をのこし、Market Street は市場町としての性格を証す名だといえる。15世紀から宗教的重要性が増し、17世紀の内戦では議会派・王党派の両者にとって戦略的拠点であった。

しかし、18世紀前半のマンチェスタは「反体制の地」disaffected country として名をはせていた。国教会高教会派 (High Churchman) と、非国教徒 (Dissenter) とりわけ長老派の両勢力が相克し、トーリ・ホウィグの党派対立と重なって、いっさいの公共事業が阻害される人的編成ができてしまっていた。ローカルな抗争は全国的な対立と共鳴し、1715年、45年とくりかえしたジャコバイト反乱において、マンチェスタは一つの拠点となった。

こうした政治社会が続くかぎり、十全な工業化も商業活動も、そのためのインフラ整備も立ちゆかないだろう。18世紀マンチェスタにおける大きな転換は、従前からの貧民問題の深刻化と、1756年～58年にくりかえした労働争議、食糧騒擾を契機として生じた。これら猶予のならない諸問題への対処のために、宗派对立をこえて、地主・ブルジョワ・文人が団結したのである。この人的編成の転換の直後 (1759年) から運河建設、街路 (都市の公共空間) の整備、公共病院、原料横領訴追などを課題とする組織が、任意醸金にもとづく委員会の形をとって ―ときに議会立法もともなって― 実現するようになった。各宗派の教会堂建設、商工人名録、そして文芸哲学協会 (Lit. & Phil.)、郷土史の

出版にいたるまでこうした任意結社の形をとった。こうして合理主義的で対労働貧民的階級意識のあらわな市民的公共圏が展開することになる。ちなみにフランクフルトのロートシルト家は5人の息子を故地、ナポリ、ウィーン、パリにならんでイギリスにも派遣駐在させたが、1799年に最初の駐在地として選ばれたのは他でもないマンチェスタであった。

ロンドン・パリ・エディンバラ・フランクフルトといった十全な意味での都市 (city) とはちがう town としてのマンチェスタの成長の苦悩は、近世から近代への転換の証言でもある。その都市的な場の複合性と 18 世紀半ばの変貌を、報告のテーマとして考察したい。

殖民都市バタフィアの盛衰

野村 亨
(慶應義塾大学)

本発表では殖民都市バタフィアの成立経過を考察することを通じてオランダ植民地における都市形成の特色を描き出してみたい。西欧勢力到来以前におけるジャカルタ地域の歴史の考察を通じてジャワの諸都市の特殊性やマレー世界における港市国家の伝統についても考察してみたい。さらにはバタフィアと相前後して成立した他の都市との比較を通じて東南アジアにおける殖民都市の類型にも言及してみたい。

殖民都市バタフィアは現在ジャカルタ市と名を改めてインドネシア共和国の首都となっている。インドネシア語での正式名称はDKI (Daerah khusus Ibukota) (首都圏特別地区) である。ジャワ島西部に位置し、人口は776万4000人(1997年推計)とされているが、不法占拠地区(squatter)の存在などを勘案すると実際には1000万人以上の人口を抱えていると推定されており、東南アジア最大の都市である。面積は590平方キロ、東西南北と中央の5区に分けられる。近年、市街地は東西南の3方向へ急速にスプロールしており、周辺の衛星都市Bogor, Tangerang, Bekasi, Depokを併せて大ジャカルタ首都圏を形成している。なお大ジャカルタ首都圏は衛星都市の名前の頭文字を連ねてJabotabek (Jakarta-Bogor-Tangeran-Bekasi-Depok) と称される。

ジャカルタは低湿地に形成された都市であり、現在でも北東モンスーン期には市内各地で洪水が発生する。

ジャカルタ市の歴史は次の6期に区分される。

- タルマヌガラ時代 (5世紀～?)
- スンダクラパ時代 (12世紀～)
- ジャヤカルタ時代 (16世紀)
- ジャカトラ時代 (17世紀初頭)
- バタフィア時代 (17～20世紀)
- ジャカルタ時代 (1942年以降)

ジャカルタは元来西ジャワの沖積平野に成立した古代ヒンドゥー国家Pajajaran王国の外港Sunda Kelapaを母体として成立したが、16世紀中葉にジャワ北岸の新興イスラム勢力Demak王国の支配下に入った。17世紀以降はオランダ殖民都市として発展した。とくに18世紀になると、南郊の

Weltevreden の開発が積極的に進められて、オランダ殖民都市としての特色が顕著になった。18世紀はまさに殖民都市バタヴィアの黄金時代というべき時期であった。

東南アジア地域の大都市は、その多くが16世紀以降西欧勢力の到来によって建設されたところが多い。しかしながらクアラルンプル、シンガポールなどを除くと、大部分の都市は西欧勢力到来以前、すでに現地勢力の交易都市ないしは政治の中心として成立していたところへ西欧勢力がさらに拡張した結果、今日見るような大都市になったのである。

ヴェルサイユ・北京・江戸

渡辺 浩
(東京大学)

「都市景観」という概念は、実際上もしくは観念上の、ある高みから広く眺めおろす視線を前提しているように思われる。さもないと足早に通り過ぎていく旅行者や観光客の視線を。(いずれにせよ、それは、そのただ中で日々、食べ、寝、働く生活者の視線ではない。) そのような視線にとって最も「美しい」のは、広く直線的な道路、その突き当たりには聳える壮大なランドマーク、整然と揃った建物であろう。ヴェルサイユ、オスマン改造後のパリ、ヴェルサイユ生まれの人物の設計によるワシントン、そして、現在のピョンヤンが、その典型である。つまり、強大な権力と単一の計画が、そのような「都市景観」を実現する。したがってそのような都市は、軍隊の行進やパレードの舞台には相応しく、その意味で権力を誇示する場としての劇場都市の性質を持つ。このような(都市史の専門家の用語にいう)バロック・シティを「都市美」の典型とするような意識が今日なおあるとすれば、それは強大な権力への讃仰や待望を意味するのではないか。

北京と江戸も、強大な権力と明確な計画によって建設され、維持された都市である。しかも、18世紀で見るとすれば、ヴェルサイユやパリの比ではない巨大都市である。それでいて、どちらも別に「近代都市」を目指して「胎動」したものの、結局流産していたというわけでもない。

北京は、ややバロック・シティの性格を持つ。しかし、その構造はヴェルサイユなどとは、まったく異なる。それは、(18世紀で言えば)清帝国の統治原理を見事に視覚化し、物質化したものである。

江戸も、考え抜かれた地割りと道路網によって成立している。それが乱雑に見えるのであれば、それはこの都市の見方、あるいは読み方に問題があるのである。それは、城下町観光ガイドがよく言うような、攻められた時に敵を困惑させるために敢えて道を曲げたというような単純なことではない(中国的な都市と宮殿の構成に親しんでいた朝鮮通信使たちも、江戸と江戸城を訪問したもののそれらの構成原理が理解できず、不思議がっている)。また、上水道の完備、屎尿やゴミの収集システムの整備に注目すれば、例えばセバスチャン・メルシエの描く同時代のパリの不潔さと、江戸の「きれいさ」は対照的である。

本報告では、以上のような観点から、ヴェルサイユと北京を主な比較の対象としつつ、独自の「作風」を持つ江戸という見事な「作品」を、鑑賞してみたい。

2005年4月発行

日本18世紀学会

113-0033 文京区本郷 7-3-1
東京大学大学院人文社会系研究科
美学芸術学研究室内
Tel/Fax : 03-5841-8958
voltaire18th@yahoo.co.jp